

漱石『倫敦塔・幻の盾 他五篇』を読む

読書会 樟 喬太郎（四二経）

コロナ禍で延期になっていた読書会が、一月二十八日（金）に開催された。オミクロンが猖獗をきわめている中の再開は、上野の山から響く大砲の音を聞きながら、ウエーランドを講義した福澤先生のお話を彷彿とさせる。杉並三田会の読書会がある限り、日本の読書の灯は守られると言ったらオーバーだろうか。

今回、取り上げた『倫敦塔・幻の盾 他五篇』（岩波文庫・解説江藤淳）は、『濛虚集』に収録された作品である（『倫敦塔』『カーライル博物館』『幻の盾』『琴のそら音』『一夜』『薤露行』『趣味の遺伝』）。『濛虚集』は明治三十九年五月発刊であるが、執筆時期は『吾輩は猫である』と並行している。題名が示すように「ようきよ集」は虚ろに漂う、「現実ではない」と言う意味である。「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「三四郎」から始まって大作「ころ」に至る迄、漱石は現実の人間社会、それも近代自我（エゴ）と倫理の関係を描いていた事を考えると、幻想をテーマとした『濛虚集』の特異性が分かる（他に「夢十夜」もあり）。英国から帰国した漱石は酷い神経衰弱に悩まされていたが、それだけに『濛虚集』は漱石の心の深淵の一端を吐露したものと考えられる。漱石文学の二面性と捉えて良いと思われる。また、英国に材を採った小説は本作品だけであることも付け加えておきたい。

今回、嬉しいことにメンバーの西條さんが、単行本『濛虚集』の原本（大正六年版）を提供して頂きました。紺の布張りのカバーで扉・目次・カット・奥付は橋口五葉、挿絵は中村不折が担当している。漱石はこの装丁や挿絵が大変に気に入ったと言う。不折の淡い水彩画（日本的、俳画的）は異国の話と日本の読者をつなぐ役割を果たしていると思われる。五葉の絵は西欧風油絵であるが、ロセツティやモリスなど「ラファエル前派」（漱石留学の直前に英国で流行った一派。現状に飽き足らずルネサンス以前に戻り、神話などに材を採る）の影響が見られると言う。モリスやビアズレイの黒と白を基調としたアールヌーボーの「題辞」を囲むユリのデザインは「死」のイメージを喚起すると言う。これは江藤淳『漱石とアールヌーボー王伝説』（東京大学出版会）の指摘です。「英国もの」である「倫敦塔」「幻影の盾」「薤露行」は此の世では叶わない「一心不乱」の愛と「死」が中心テーマとなっています。江藤は同書に於いて不折、五葉の起用によって「文学と視覚芸術とを統合しようとする漱石の意図」（ロセツティ、ミレイ、モリスなどラファエル前派の絵画と小説の構想が響きあう間ノベルと言えようか）が明瞭に窺えると言う。絵と小説の統合を指摘した江藤説は傾聴に値すると思われまます。

作品は楽しい読み物ですから、逐一の解説は省略して『濛虚集』を読む上でキーワードとなる事項を若干説明しておきます。「幻の盾」は『帝国文学』、「薤露行」は『中央公論』に寄稿されたものであり、小説家以前の漱石としてはかなり構えて書いたと思います。それだけに表現が堅く現在では読みにくい箇所もあります。

浅学の漱石論ですから誤読や勘違いがあると思います。皆さんのご指摘、ご意見をお待

ちしています。

注・()内の数字は文庫本の頁を示す。

「倫敦塔」は漱石の「倫敦塔」見聞記である。但し、単なる見聞記・案内記ではない。橋を渡って（歴史の世界に入る）塔内に入るとかつてこの場所に幽閉され、処刑された王や王子達の「幻の如き過去の歴史を我が脳裏に描き出してくる。」（8）。門をくぐると（「この門を過ぎんとするものは一切の望みをすてよ。」）「余はこの時既に常態を失っている。」。塔橋←中塔←逆賊の門←血塔の門←白塔←ポーシヤ塔と歩を進めるが、クライマックスはポーシヤ塔の記述である。ジェーン・グレーと子供の幻影を見る。「謎の女」の出現。カラスは「三羽」しかないのに女は「五羽」いると子供に断言する。首切りの斧を研ぐ場面など漱石の描写は秀逸である。「趣味の遺伝」の戦争場面もそうだが、漱石のプロットは表現が上手い。

「倫敦塔」は奇妙な書き出しで始まる。その後も行こうと思つたが、「一度で得た記憶を二返目に打壊すのは惜しい」（6）と言う。案内記を書きながら二度と行かないとは奇妙な言い分である。これは漱石が良く使う謎かけである。読者に「あれ？」と思わせて、後で種明かしする手である。宿の主人がカラスは奉納されているもので「五羽」飼われている事、石の壁に刻まれた恨みの「題辞」は観光客のいたずらである事、謎の女の解説は案内記に記載されている事など、悉く説明して漱石の幻影の種明かしをする。せつかく体験した中世の幻影の気分を壊され、二度と行きたくないと言うのである。疑問を投げかけその種明かしする手法は、「琴のそら音」「趣味の遺伝」にも見られる。

もう一つ注目すべきは「謎の女」の登場である。ポーシヤ塔のジェーンは（22）「不思議な女」とされる。「謎の女」は「趣味の遺伝」で浩さんが見初める大銀杏の女もそうである。「謎の女」の存在で読者は物語に引き込まれるのである。

「倫敦塔」で見落としがちだが、冒頭で二年間住んだロンドンに住みにくく神経は「魅海苔の如く」なってしまった。「マクス・ノルダウの『退化論』を今更ながら大真理と思う」（6）と言う記述がある。つまり「魅海苔」の様な頭脳に、「倫敦塔」に刻まれた歴史が幻影として立現れたと言うのである。「退化論」は「吾輩は猫である」に「猿股論議」として面白可笑しく取り上げている。「趣味の遺伝」では何ともおかしい遺伝の法則が説かれている（205〜207）。漱石の小説には「科学主義」が根底にある。漱石はモースやフェノロサが持ち込んだ「進化論」の影響を受けているので、「猫」や「三四郎」の野々宮などが描かれている。漱石の生きた時代は「科学」が持てはやされた時代であった。円朝の「真景 累ヶ淵」の「神経」であるように、落語にも科学主義が及んでいた。漱石の種明かしも単なる幻想に終わらせず、科学的にも説明して科学主義の風潮に応えたのである。

実は科学的に「落ち」を付けたように思われるが、ここに漱石の悪戯が隠されている。宿の主人は「五羽」のカラスを飼育していると述べるが、ポーシヤ塔のジェーンと子供の会

話では「三羽」である。残りの二羽はどうしたのだろうか？ジェーンと子供ではないのだろうか？科学的に説明しながら、科学では説明できない世界があると漱石は言いたいのだと思う。

「琴のそら音」でも「狸談義」で余が「催眠術」にかかり恐怖を感じたからくりが暴かれる。しかし、新妻が大陸にいる夫の「鏡」に現れた超自然の事実は不問に付されている。読者がこれに気づけば改めて恐怖を感じる仕組みになっている。ニーチェが「超人」を想定したように、漱石は科学の先に説明不可能な世界を「幻影」と考えたのではないか？

もう一つ漱石の時代を見る「眼」を紹介しておく。宿の主人が「何頗る別嬪だつて？倫敦にや大分別嬪がいますよ。少し気を付けないと剣呑ですぞ」（26）と言う一行がある。漱石が留学した時期（明治三十三年）はビクトリア女王が薨去され国葬が行われた（明治三十四年）。繁栄の裏で社会の矛盾も露呈した時期である。長谷川如是閑によれば、場所によつては風俗的に猥雑な世界があつた（当時、女性の職業は限られていた）。宿の主人の言葉はこれを指している。漱石の留学十年程前に世間を震え上がらせた女性連続殺人事件「切り裂きジャック事件」があつたが、場所によつては醜悪な環境であつた。漱石は英国の恥部をこの一行に記している。因みにこの時代に活躍したシャーロックホームズは社会の暗部で起きる事件を科学的手法によつて究明した探偵物である。

「幻の盾」「薙露行」は中世の「騎士道物語」である。時代背景はアーサー王の時代。五世紀に英国はローマ軍が撤退した後、アングロサクソンの侵攻を受けるが、これに立ち向かったのがケルト民族の英雄アーサーであつた。その英雄振りは円卓の騎士たちと共に伝説化（聖杯物語などを含む）している。

戦場の論理である剛毅、勇猛を貴ぶ騎士の行動が、時代と共に洗練され十二世紀には名誉を重んずる、洗練された行動、寛大公正などの徳目が形成された。この中に際立ったテーマとされるのが「高貴な夫人に対する敬慕ないし崇敬」である。騎士と夫人（本来は既婚夫人を対象）の間は精神的なものであることが大前提である。この禁忌を破つたものは制裁される。「幻の盾」の冒頭で一人の騎士が敬慕する女性から円卓の騎士を倒して私への誠を示せと無理難題を要求されるが、夫人はこの様に無理難題を吹きかけて騎士の真剣さを試すのである。また、「幻の盾」でウィリアムが「騎士の恋には四期ある」とクララに蘊蓄を傾けて語る場面がある（54）。漱石の創作と思われるが、説明してやまない真面目な漱石を見るようで面白い。

各地の伝説を十五世紀にマロリーが『アーサーの死』としてまとめたが、十二世紀頃に確立した騎士道を前提にしている。漱石はマロリーを種本としている（加えてテニソンの詩「ランスロットとエレーン」「シャルロットの女」）が、専ら騎士と夫人との愛情関係に関心を寄せている。

「幻の盾」は漱石の創作である。ウィリアムと敵方の王女クララの「一心不乱」が生む悲恋を描いている。怪物ゴーゴンの呪いのかかった「まぼろしの盾」、盾に彫られたメデュー

サの顔と悉く蛇の髪の毛が破局を暗示するのだから、気味の悪さを描く漱石の描写は見事である。二人の愛は盾の世界で成就する。ウイリアムはクララの「髪の毛」を身に着けているが、髪は女の命とも言われ二人の愛情の強さを示す。「内懐からクララの呉れた一束ねの髪の毛を出して見る。・・・壁の上にかけてある盾の真ん中で優しいクララの顔が笑っている。」「・・・ウイリアムは手に下げるクララの金毛を三度壁に向かって振りながら「盾！最後の望みは幻の盾にある」と叫んだ。」(51から52)を見て分かるように、クララとメデューサの髪がこの作品の鍵である。

「幻の盾」「薙露行」は物語の冒頭に説明書きがある。「幻の盾」は「これを日本の物語に書き下さなかつたのはこの趣向とわが国の風俗が調和すまいと思つたからである。」(6)。「世に伝うるマロリーの『アーサー物語』は簡浄素樸という点において珍重すべき書物・・・」(128)と断っている。わざわざ小説の成立を説明するのは訳がある。漱石は英国での研究成果を『文学論』に纏めたが、小説の本質をF+fとして提示した。fは作品から感じる「情緒」であり、Fは「知覚ないし経験」を表している。Fは「時間と空間に規定された歴史的东西であり、集合的なもの」を意味している。文学作品は民族や、歴史によつて強い影響を受けるのであつて、他国作品の理解が困難になるのはそのことに起因していると言う。つまり漱石は日本的な怪異小説(例えば鏡花)と混同してくれるなど読者に要求している。読者を初っ端から異国情緒に引き込む漱石の戦術の表れと考えられる。

「薙露行」の大筋はマロリーとテニソンの詩を参考にしているが、「鏡」(シャロットの女)、「袖」「船」の章は漱石の創作である。題名の薙露は薙(ニラ)の葉につく露の事で乾きやすい、つまり果敢無い事の喩です。「薙露行」とは「貴人の棺を送る挽歌」ですが、この「貴人」とはいつたい誰のことか、清純なエレインか、后ギニヴィアか、或いは別の人の事かはつきりとは示されていない。江藤は前掲の論文で「貴人」とは漱石が心に秘めた「兄嫁登世」だと指摘している。この時代の漱石の作つた英詩、ラファエル前派の絵画とくにモリスやビアズレーのオールヌーボーのデザインへの嗜好など傍証を固めている。但し、登世に結び付ける結論には異論も呈されているので注意が必要か。

第一章「夢」はランスロットとギニヴィアの不義の場面(漱石らしからぬ?)から始まるが、禁忌を破つた二人の破局、死を既に予感させる。第二章「鏡」はストーリーからして違和感がある。シャロットの女には魔女マーリンの魔法がかけられているため、鏡から目を外し疾走して来るランスロットを振り返ったとき鏡は壊れシャロットは死ぬ。二つの作品で漱石は何人もの「死」を示している。本来、マロリーではエレインとシャルロットとは同一人物である(テニソンが描き分けた)。テニソンの詩「シャロットの女」をヒントに漱石も別人として描いた。漱石はエレインを清純な乙女として描き、シャロットの女は魔女の呪いを取り次ぐ存在としている。マーリンの呪いはエレインとランスロット(ギニヴィアも)を破局に引きずり込むといった趣向である。試合で傷を負つたランスロットは壁に「罪はわれを追い、われは罪を追う」(155)と書置きして姿を消す。エレインは傷心の

あまり命を落とす。エレーンの希望によって棺を載せた船は白いバラ、白いユリで飾られ白き白鳥の導きによりアーサー王とギニヴィアの居城に流れ着く。この場面は不折によってさし絵が描かれている。江藤はウォーター・ハウスの絵『シャロットの女』を漱石はテイト・ギャラリーで観た可能性を指摘している。ギニヴィアは恋敵のエレーンの美しい死顔を見て「美しき少女」とつぶやき熱き涙を流した。「船」の章は「薙露行」の中で最も美しい場面である。三十八歳の漱石の女性への願望が吐露されているようにほほえましい。この作品は雑誌『中央公論』に掲載された。当時、『中央公論』に載ることは作家として認められたことを意味した。『吾輩は猫である』の成功と相まって小説家として立つ自信を持つたに違いない。一流誌を意識して「薙露行」には力の入り過ぎた部分が散見される。又、「鏡」の章は前後の流れが理解しにくい恨みがある。

「琴のそら音」は田朝の人情話を下敷きにしている。「余」の許嫁「露子」は「牡丹灯籠」のお露であり、白山から大日方台の帰路や「狸談義」は「真景累カ淵」の冒頭と重なり、「作蔵」「源助村」も延長にでてくる。この小説の読みどころは、「法学士」（論理的思考の持ち主）の主人公が、「幽霊研究家」津田からインフルエンザで若妻が生前「必ず魂魄だけは御傍へ行って、もう一度御目に懸かります」（90）と言いつ残した話を聞いてすっかり暗示にかかる事にある。暗示にかかった「余」が夜に白山御殿山の下宿を出て帰路につくが、余の不安は膨らみ「実際余も死ぬものだと感じた」（96）り、露子の死まで想像するに至る。四度の「死」に遭遇する。恐怖心がどんどん高まっていく表現は流石に漱石である（この小説の狙いは恐怖の表現の妙にある）。露子の死は杞憂であり、「床屋談義」で種明かし（落ち）がされる。これも科学主義。ただし、この種明かしでは「鏡」に現れた新妻の一件は不問に付されている。つまり漱石は同人雑誌『七人』（小山内薫など学生が集まって作った。この号だけで終わった）の読者をからかっているように思われる。漱石の悪戯である。

なお、「余」の自宅がある小日向台には夏目家の菩提寺「本法寺」がある。「趣味の遺伝」で主人公が、「この時ほど美しいと思った事はない。」女性とすれ違うのはこの寺である（186から190）。

終わりに

読書会の日にはラーメン店に立ち寄ったのですが、その店の名が「吾輩は猫」でした。勿論、代金はネコババせず払ってきました。この日は漱石漬けの一日でした。漱石は面白い！参考文献 遠藤周作『人生の踏み絵』（新潮社）。遠藤が自作を使って小説の書き方を述べたもの。廣野由美子『批評理論入門』（中公新書）。フランケンシュタインをつかって批評理論を分かり易く説明している。

以上

令和四年二月一日